子どもたちに惹かれた良寛　二

西をさむ

さあ今日も子ども達は来るかなと袂に手鞠を入れて良寛は待ちます。そうしている内に楽しそうにはしゃぐ声が耳元を擽ります。もう我慢出来ません。庵から飛び出て遊びの輪に加わります。子ども達の歓声の声が一斉に湧き上がります。何故そうなるのでしょうか。それは、良寛が子ども達を社会的弱者とは思っていなかったからです。鞠突きをすれば決して手を抜かず、鞠を逸らせば必死に追い掛けます。良寛は子どもに成り切って居たのです。まあ当時の五十代ならば身体的には対等の立場だったのかも知れません。子ども達は良寛を大人とは認識して居なかったのです。この嘘偽りの無い行動が余計に良寛を俗世の偽りから逃れさせたのです。ただ楽しいから笑っている子ども達、はしゃいで居る子ども達が一番美しく見えたのです。

さわぐ子の捕る知恵はなし初ほたる　良寛

蛍狩と言う季語が有りますが、子ども達にはそんな風流韻事な遊びは思い付きません。

ふわふわ飛んでいる蛍を見付ければ跳び付いてでも捕ろうとします。小川や田圃に嵌るのが落ちです。又、瞬いて止まっていれば素早く捕ろうとしますが大抵これも空振りです。唯蛍と一緒に遊びたいだけなのです。その可愛らしくていじらしい仕草に良寛が救われるのです。きっと鉄鉢の中の食べ物が思い浮かんでいたのかも知れません。

ここで私の頭を一つ短編小説が過ぎりました。あの大監督の大島渚をぶん殴った男、直木賞作家・野坂昭如が書いた「火垂るの墓」です。小説の終わりに近い部分で、たくさんの蛍が飛び交う中、この世から消えてゆく幼い妹の幼い命。もう二度とあんな焼け野原を作ってはならないと訴え掛けて居るのです。大人は過ちを犯すが子ども達には決して代償を払わせてはならないと。

前回ある議員の事を書きましたが、また一つ新しい言葉を知りました「勾引（こういん）」です。字から推察すると首筋を鈎で引っ掛けて無理矢理出廷させる遣り方の様です。本人は後になってそんな事も記憶に無いと言うでしょう。その数日後、もう一人、大臣室に居たかどうかの記憶も曖昧な人が出てきました。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

「越後屋、御主も悪じゃのう」。この台詞は田沼時代とばかり思っていましたが、現代でも使うんですね。「相模屋、羊羹が食いたいのう」と。羊羹だけに甘い利が明らかに詰めてあったのです。これじゃ泣くに泣けません。笑うに笑えません。滑稽ですね。子ども達に笑われますよ。
さて、滑稽の文字を分解してみましょう。「滑」には滑らか、ずるい、尻尾を掴ませないと言う意味も有ります。「稽」には躊躇う、寄せ合わせて考える等が有りますが、「荒唐無稽」の様に、出鱈目な事にも使います。
新池や蛙とびこむ音もなし　　良寛

（つづく）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。